

## 見分けの鍵(ルカ 12:54-59)

私たちがこの地上での人生を生きるためには、知識また経験などは必要なものに間違いありません。しかし、信者の私たちが覚えていないといけないことは、だからといって、その知識と経験が私たちの人生の本当の問題の解決に役に立つのかということ、それはまた別の話なのです。なので、信者の私たちは、世の中を生きるために必要な知識、さまざまな経験に対してどのような姿勢をとるべきなのかいうことを明確にしなければいけないと思います。イエス様は今日の聖書の中で、ユダヤ人、またパリサイ人、特に律法学者たちに向かってそのことを明らかに語っていらっしゃいます。みな知識があり、経験があれば良い。それで何かが分かった。人生の問題に対しても、すべて正解を知っているかのように勘違いしているのです。それに対して、あなたがたの知識は確かに認めますよ。でも、その知識があるのに、なぜ本当のことについては気づいていないのかということをおっしゃっています。特にそのことをおっしゃる時に、偽善者たちよとおっしゃっています。前にも申し上げましたように、偽善者というのは、嘘をつくという単純な意味ではなくて、キリストのほかに違うもので着飾っていることを偽善というわけです。彼らに改めて偽善者たちよとおっしゃりながら、知識は何なのか、知識の限界が何か、それで何が必要なのかということを知り明かしている箇所が、今日の聖書の箇所です。それを通して、今を生きる、知識にあふれるこの世の中を生きていく信者として、どのような姿勢をとるべきなのかいうことをぜひ理解し、心に留めていただきましょう。

### 1. 知識（経験）の限界を認め

まず第1に、今日の聖書のお話を通して私たちが正しく確認しないといけないことは、知識は必要なものに間違いありませんが、また、経験はとても大事なものに間違いありませんけれども、その知識と経験は限界あるものだということを認めなければいけません。

必要なものだからといって、それがすべてではありません。これがクリスチャンの私たちのスタンスです。知識と経験は必要なものに間違いありません。けれども、その知識と経験は限界あるものだという認識を持っていなければなりません。

#### 1) 知識を得るあらゆるきっかけ

私たちが知識を得る、そのあらゆるきっかけなどがあると思います。学校に行って勉強しながら教えてもらって習得する、そういう知識もあります。また、生まれて家庭の中で、親や兄弟などを通していろいろ言われる、そのような知識もあります。それが私たちにいつの間にか、知らないうちに知識として脳に刻印されることになります。場合によっては、自分で独学しながら得た知識もたくさんあると思います。最近はインターネットの時代なので、ネットなどを通して溢れんばかりの知識に接することになります。それがファクトなのかフェイクなのか、さまざまな内容がありますが、またメディアを通して教えられる、入ってくる、そのような情報、知識などもたくさんあります。また、個人的にさまざまな経験を通して、そこから得られる知識というものも無視できないでしょう。このように、あらゆる通路を通して知識は私たちに入ってきて、私たちに蓄積されるようになるものなのです。そのような知識が悪いとは言いません。必要なものなのです。もちろん、それが本当にファクトなのかフェイクなのかということを正しく見分けるようにしないといけません。しょうけれども。

#### 2) 真理に至れない人の知識（経験）

それがいくらファクトであり、私たちが人生を生きるために必要なものであっても、その知識は真理には至ることができないものだということをしっかり分かっているといけません。いくら豊富な経験があったとしても、その経験は真理に至らせることにはできないものなのです。世の中では、このような理解と認識というものは見当たりません。だから、クリスチャンの私たちも一緒に

流されて、知識、経験に対してそのように跪く場合がありますが、無視してはいけません。しかし、それに屈服するような姿勢は、信者、クリスチャンの姿勢ではありません。それでは信者としての役目を正しく全うすることは不可能なのです。知識と経験というものは、私たちがそれに条件なしで屈服するような、そういう理想ではありません。真理ではありません。南風が吹いてくると熱くなる、それは知識です。経験、統計による知識なのです。間違いありません。

#### ①人間

いまイエス様は、単純に例え話としてそれを取り上げましたけれども、人間が分かっているこれはこれだという知識のことをすべて指しておっしゃっていることなのです。そういう知識があなたにたにはあるのではないかと。あると思いますよ。それはその通りだと思うよ。なのに、その知識があるのに、なぜその知識をもって本当の真理には気づくことができないのかとおっしゃっているわけです。言葉を変えますと、申し上げました通りに、知識には、私たちは、普通の一般の人はそういうことに気づいていないでしょうけれども、だからみな屈服しているのですが、知識には限界があるということを示していられっしゃることなのです。いくら素晴らしい知識、研究によって得られた結果であっても、最先端の知識でも、人間がどのような存在なのかについては知ることはできません。自分なりにはその知識に基づいて、人間ってこんなもんですよといろいろ語っているのですが、人間というのは神のかたちに造られた特別な存在であり、ほかの獣とは違うたましいのあるものであって、創造主の神様と交わり、その神様が投影されている、そのような存在です。でも、世の中の最高の知識を全部結集しても、人間がどんな存在なのかについては1ミリも知ることができません。そのような知識を究極的な頼りにするということは、なんと危ないことであり、愚かなことでしょうか。でも、私たちは生まれた時からそんなもんだとインプットされています。特に、学校の教育を受けないといけなくて、そこでは言葉で言わなくても、ニュアンスとして知識こそすべてなんだよという風に教え込まれることに慣れているわけです。今、礼拝をささげているクリスチャンである私たちも、知らず知らず、私たちの心の内側にそのように刻印され刻み込まれているかもしれません。そのやぐらが碎かれるときとならないといけません。

#### ②問題

なので当然、人間の問題は何なのか、問題の本当の本質が何かを知ることは1ミリも不可能なのです。目に見える問題が問題、せいぜい頑張っただけ目に見えない心理的な問題が問題だとアプローチすることまではあるかもしれません。けれども、人の本当の問題が神様を離れた霊的な問題であり、解決不可能な問題であるということには至ることはできません。それが知識の限界なのです。なのに、他の人より少し勉強して知識が入っている人は、他の人より何かわかっているかのような勘違いをして、真理に目を向けようとしないのです。残念なのは、教会にまで来ているのに、知識のある人はこの真理のメッセージに耳を傾けようとしないのです。なんと残念なのでしょう。その知識に限界あるということを知らないからなのです。

#### ③必要

当然ながら、人間に何が必要なのか、人間に、人生に、この人類に本当に必要なものは何なのかに対しても知ることができません。いくら知識があっても、戦争の場合はお互いに協定を結び、停戦、休戦は必要なものなのでしょうけれども、それが問題の解決だと思います。それで本当に解決になったのでしょうか。歴史を振り返って素直に見てみてください。何が必要なのでしょうか。

#### ④幸せ

結局、人間にとって本当の幸せは何なのかに対して理解することはできません。近づくことはできません。だから、知識があるにもかかわらず、幸せとは縁の遠い無縁な人生を頑張っただけ、むなしく人生が終わり、永遠の滅びのところに落ちるしかありません。知識があっても。これが知識の限界です。いま礼拝をささげている皆さんは、今のこのお話を長く申し上げなくても、お話を聞いて「なるほど、そうなんだ」とならないといけません。他には願くような人はいません。だから私たちに向かって世の光とおっしゃっているわけです。自分では自分のことをなかなかそのように見て

いないかもしれません。私のような人間がと。でも、このようなお話が聞き取れる存在は私たちの他にはありません。それに気づいたときに、なぜ偶像の国家であり、宣教師の墓と言われる国に私は生まれたのか。なぜ私は、他の人には理解できない、そういう複雑な、解決不可能に見える問題を抱えて悩むようになったのか。そのことの理由が見つかるようになります。全部が使命に変わり、ミッションに変わるわけです。知識は必要なものに間違いありませんが、真理に至ることはできません。

### 3) 真理を暗ます人の知識（経験）

できないどころか、その知識は真理に至ることができないので、逆に真理を暗ませるものになりかねません。真理に敵対するものに用いられることになるということも重ねて覚えていただきたいと思います。

#### ①ピリピ 3：8

そういう意味で、パウロは、ピリピ 3：8において、そのようなすべてをちりあくと宣言したわけですね。それはいらぬという、無視する話ではありません。いま申し上げましたように、その知識、経験というものの限界、限界どころか、それがむしろ真理を暗ませて真理に敵対する道具になってしまうので、そういう意味合いをもって、パウロは自分でその律法という知識をもって、それを身をもって体験していたものなのです。だから、パウロはそのすべてを指してちりあくと迷わずに宣言しました。私の弟の一人が、小さい頃、私より熱心に教会に通い、教会生活に一生懸命でした。私は適当だったのですが。それで途中、私は違う理由で教会を離れることになりましたが、その真面目に教会に通っていた弟が、大学に入ってから教会を離れることになりました。

#### ②進化論

その大学で何を専攻したのかというと、生物学なのです。生物学では必ず進化論を教えます。進化論は正しい知識でもないのに。いま申し上げているのは、正しい知識であっても限界があるということをお知らせしました。進化論は知識でもないのに、とにかく知識として扱われて、その話を聞きながら、私の推測なのですが、教会に一生懸命通って一生懸命献身していても、真理を知らないまま教会に通っていた者は、他の知識が入ってきた時に知識に屈服することになるのです。非常に残念です。いまだになかなか回復できていません。

#### ③ユダヤ人

イエス様がいま語っている相手になるユダヤ人、特に律法学者たちは、神様からみことばをいただき、律法をいただきました。しかし、真理を知らないまま、真理が欠けているまま、律法という知識を持っていたので、最終的には真理であるキリストを十字架に釘づける、神様に敵対するものに用いられることになります。それが知識の怖さなのです。恐怖なのです。

改めて申し上げます。知識はいらぬものではありません。学生の皆さん、学校で一生懸命、真面目に勉強してください。しかし、知識は限界あるものであり、その限界のゆえに真理に対して敵対する道具になってしまいます。よくよく吟味してみてください。世の中の知識のさまざまな分野で出している結論がどういうものなのか。2部礼拝でもたぶん申し上げるでしょうけれども、日本に限らずに世界中の芸術、映画、特にアニメーション、漫画、音楽、歌謡曲等を見ますと、結局そういう話なのです。真理を知らないがゆえに、結局、人間最高と訴えるものなのです。耳障りはとても甘い、そういうフレーズばかりなので、みなそれに感動し勇気をもらったと、いろいろな感想を言いますが、クリスチャンの私たちは正しく見分けていかないとはいけません。知識と経験は限界あるものなんだという認識を固めていただきたいと願います。

なので、当然な結果でしょうけれども、真理に至ることができない知識なので、2番です。

### 2. 人生の破滅を止められない人の知識（経験）

人生の破滅を止めることができません。知識は人生の滅びを止めることなどできません。

いくら豊富な経験をもって、その経験による知識をもっているとしても、人生の破滅を止めることなどはできません。むしろ、破滅に拍車をかけるような役割を果たすことにもなるわけです。それが知識と経験というもののなのです。なぜ人は破滅の道を歩いているのでしょうか。

#### 1) サタンの落とし穴

人は神様を離れて以来、いくら頑張って、いくら知識を手に入れて、いくら豊富な経験をして、もがいて頑張っていたとしても、それでは絶対解決ができない、サタンの落とし穴に引き落とされているからなのです。人間の力、知識では、それがあることも知らない、知ることができないし、そこから抜け出すことなどを絶対できません。サタンが人々を破滅に追い込むために作り出した落とし穴というものがあるのです。神様を離れて、そのたましい、霊が死んでしまった結果、人間は自分、自我という落とし穴に落とされているわけです。自分が人生の主人なのです。この話を一般の世界で申し上げますと、そのどこが悪いの？それではないからみなアップアップしてるのではないの？あなたが主人公なんだよ。あなた次第なんだよ...というのが世の中のメッセージなのです。心理学のメッセージも結局はそれなのです。それが悪魔サタンの落とし穴です。絶対神様に気づけないように。その落とし穴に落とされる、霊が死んでしまったので、目に見えるもの、肉的なものが基準になって、それで幸せを天秤にかけるわけです。それが落とし穴なのです。世の中ではそれが当たり前で、それで一生懸命追い求めているのですが、それが霊が死んだという裏返しであることをクリスチャンの私たちは忘れてはいけません。だから、御座のやぐらが建つように祈る理由は、その地上のもの、目に見える肉のものによって幸せを天秤にかけるようなそういうやぐらが全部砕かれて、神の国が自分の内側に臨まれるために祈るわけです。肉体的に安全、それが幸せではありません。肉体的に豊かになるから、人に認められるから、それが幸せではありません。なのに、クリスチャンの99.9パーセントはそういうやぐらを礼拝をささげながら持っていて、礼拝の理由も祈りの理由も全部それなのです。だから暗闇が砕かれないので弟子になれないし、自分を通していのちの運動が行われないのです。教会に一生懸命、献身はするかもしれませんが。知識というものは、このようなサタンの落とし穴、肉というサタンの落とし穴には1ミリも役に立ちません。たましいが死んで霊が死んでしまったので、目に見えない神の国、サタンの国、永遠の世界などとは無縁で、この世界がすべてなのです。この世がすべてなのです。だから、世のものが目的であり、世にあるものを目標にして頑張る。それをいわば成功という言葉で語っているのですが、それが悪魔の落とし穴なのです。クリスチャンは、世の中でうまくいくために、成功するために生きる、存在する者ではありません。いま悲しいのは、このような話がすぐに「なるほど」と頷くべきなのに、クリスチャンの私たちが今このような話に違和感を持つということが悲しいことなのです。世にあるものが、人に認められること、名誉、地位、成功等々が目標なのです。別に成功を否定するつもりはありません。しかし、私たちは成功を目標にして、理由にして生きる存在ではありません。それは加えて与えられるものなのです。二部礼拝でもう少し細かく詳しく申し上げますが、このサタンの落とし穴に引き落とされているのです。人間の知識と経験は、このサタンの落とし穴から人を引き上げることなどは絶対不可能なのです。その落とし穴に落とされていて、そこから絶対出られないように、サタンは重ねて重ねて人を追い込んでいるのです。

#### 2) サタンの枠

それで枠を作ります。自分、肉、この世、世のもの、それを目標にして、肉のものを幸せの基準にして、自分が主人になって、自分が良ければ良い。自分が好きなものが好き、良いと思うのが良いと。神様がどう思っているのか全く関係ない、自分次第なのです。それが本能的なので、何が問題なのかも知らないのです、クリスチャンの私たちも。なぜ拗ねるのか、なぜ怒っているのか、全部自分が基準なのです。それで、悪魔の暗闇のしわざからなかなか出ることができないのです。20年、30年教会に通っていても。なぜ悲しいのでしょうか。神様は私が悲しんでいることに対して喜んで許されたかもしれませんが。そういうことは全くお構いなし。自分しかいません。その自分と肉とこの世という落とし穴を丈夫にするために宗教という枠を作るのです。偶像崇拜という

枠を作るのです。占いなどを通してシャーマニズムという枠を作ります。その枠に閉じ込めているゆえ出られません。人間の知識というものは、このようなサタンの枠を打ち破って、そこから人が逃れるようにする力などは1ミリもありません。むしろそれを助ける道具になるかもしれません。

### 3) サタンの足かせ

その結果、悪魔サタンがはめられた足かせ、つまり滅びの運命の足かせにはめられて、人生を引きずられ、最終的には永遠の地獄に陥る。その運命の足かせにはめられているわけです。身分そのものが滅びるしかない悪魔の子と言われる身分という運命の足かせにはめられているのです。精神的に正しく考えることができない、そのような運命の足かせにはめられて、肉体的にも壊れるしかないし、人生いくら頑張っても空しくなるしかない運命の足かせにはめられて人生が終わります。そして結局は死んでさばかれて永遠の地獄に落ちるしかない運命の足かせにはめられ、それが次世代、子孫たちに霊的なものの遺産として受け継がれるしかない運命の足かせにはめられ人生を生きることになります。人間の知識と経験というものは、この運命から私たちを解放しようという力は1ミリもありません。それが人間の知識であり、経験というものなんだということをぜひ覚えてください。

### 4) エペソ 2:1-3

なので、それをエペソ 2:1-3 に短くまとめていっちゃいます。自分の罪過と罪との中であって死んでいたものであって。つまり、神様が離れて、悪魔サタンが人間のたましいを支配する状態になってしまいました。知識によって知ることもできないし、この問題に1ミリも役に立ちません。結果、人間がいくら踏ん張っても、空中の権威を持つ支配者、悪魔サタンが作り出した世の流れに従って歩むしかありません。神様からどんどん離れて、悪魔をどんどん喜ばせるような文化の中を生きるしかありません。なので、生まれたときから神の御怒りを受けるべき子として生まれて、生まれたときから精神的な問題、さまざまな問題を全部抱えて生まれ、何かのきっかけがあって、それが症状として現れるだけなのです。いじめによって精神的におかしくなるのではなくて、生まれたときから精神的におかしい状態で生まれ、いじめをきっかけにして、それが症状として現れただけなのです。なので、精神的に患っている人と普通に暮らしている人とみな一緒なのです。生まれたときからみな滅びるしかないものを抱えて生まれるわけです。赤ちゃんは純粹で何もないかのように見えるのでしょうか。生まれたときから。神のことばを信じてください。これを信じないとキリストと言いながらも、キリストと私とは関係ありません。キリストがなぜ世に来られないといけなかったのか。なぜ十字架で血を流して苦しめられ、死なないといけなかったのか。皆さんが犯したその罪のためでしょうか。とんでもありません。生まれながら悪魔の子という運命を抱えて生まれ、生まれながら地獄の運命を抱えて生まれて、精神もすべてがダメな状態で生まれてきたわけです。これが人間です。これを知らないから、誰かのせい、何かのせいにするしかありません。それはきっかけに過ぎないものなのです。親が私を捨てた。それで私は狂ってしまった。とんでもありません。生まれながら狂ってしまうしかないものを抱えて生まれて、たまたま親に捨てられた。それをきっかけにして、それが表にただけなのです。勘違いしないように。だから、教会に通いながらも、みなバラバラなのです。同じことを語るようにならないといけません。同じ志しをみな持つようにならないといけません。なのに、バラバラの知識をもってお互いにぶつかるので、教会は喧嘩ばかりになります。知識、経験というのは破滅の人生を止めることなどできません。

### 5) 神様との和解（キリスト）

だからイエス様はおっしゃいました。知識があることは悪くありませんけれども、知識はこういうものなので勘違いしないで。知識によって最終的にダメになる前に和解しなさいと。知識うんぬん以前に、神様と和解をしないといけないよと。今日の例え話では、裁判官の方に引き渡す。たぶん裁判官は神様のことでしょ。引き渡す方がキリストかもしれません。いまキリストが来ていらっしゃるのではないのでしょうか。キリストを知らないのです。真理であるキリストがいらっしゃるのに、知識が豊富なのに、キリストを知ることも見ることも信じることもできません。だから滅びるしかないのです。なので、知識を自慢したり、知識に頼ったり、知識を誇ったりすることなどし

ないで、愚かな国民よ。キリストと和解しなさい。いま、神の和解のためにキリストが来ていらっしやるのではないか。和解をしなさいということは、目の前にいらっしやるキリストであるイエス様を信じなさいということです。それこそが本物の知識なのだ。神様との和解、キリストを信じて受け入れること、これが知識と経験の前で求められることなのです。これこそが本当の知識なのです。

まとめましょう。

なので、クリスチャンの私たちはこれからも肝に銘じましょう。何かを知っているからといって、本当のことを知っているわけではないんだと。これを絶対忘れないように。韓国語の方がこれはよりわかりやすいです。日本語でわかりやすく考えてもこれ以上できませんでした。何かを知っているからといって、本当に知っているわけではない。아는게 아는게 아니야。それを肝に銘じて、真理に基づいて知識を改める必要があります。つまり、キリストを中心にして、まず自分の人生を解釈するように。皆さんの過去、何があったのでしょうか。良かったのでしょうか。悪かったのでしょうか。不幸だったと思うのでしょうか。幸せだったと思うのでしょうか。いろいろあるでしょうけれども、そのすべてに対しての知識は間違いなのです。皆さんの認識はすべて間違いなのです。何も役に立ちません。悪魔が喜ぶだけです。なので、それをキリスト中心にして、キリストと出会うために、真理に導かれるための旅程だったと、キリストを中心にして人生を解釈する、感謝にならないといけません。自分の過去を振り返って感謝していない人は、まだキリストをよくわかっていないことなのです。何かしら心の傷がそのままであり、何かのわだかまりみたいなものが残って固まっているということは、キリストを知らないことなのだから、暗闇の力は砕かれないのです。クリスチャンがいらっしやることで、必ず周りに神の国のことがなされるはずなのに、そうでないのは、自分の内側がまだ暗いからです。性格が明るいから明るいのではなくて、キリストが明確じゃないと暗いのです。暗いというのは、悪魔、悪霊のしわざなのです。

そして、キリストを中心にして歴史を解釈するようにイエス様がおっしゃいました。なぜ時代を見分けることができないのか。あんなに知識を自慢してるのに、いくら知識があっても時代、歴史を正しく紐解くということは無理なのです。時代は何なのでしょう。キリストを中心にして、キリストが来られるために神様が動かされた歴史です。キリストが世に來られて、新しい時代、神の国が始まる、そういう時代が訪れてきたわけです。いまイエス様がいらっしやるとき、そういう時代なのです。いまの時代は、イエス・キリストがすべてを完成なさって、天に昇られ、御座の主となり、歴史の主となって、地の果てにまで、世界の定められたすべてのたましいが救われる世界福音化という明確な目標を持って動かし導いていらっしやる時代なのです。それを指して終末と言います。いまの時代は終末なのです。終末というのは、裏返しますと、世界福音化のために動いている時代という意味なのです。キリストを中心にして歴史を解釈しないと、二部礼拝で申し上げますが、いままでになかった山火事が起きて、戦争が3カ月で終わると思っていたのに、3年も続いて、和平協定も決裂したりというような内容を見る、そして、それを解釈することが、世の中の人と一緒にしてしまうのです。クリスチャンの解釈は違います。それを見るたびに、まずは、なるほど、いま終末なんだ。世界福音化のために神様が許していらっしやることなんだ。歴史の何事にも飲まれることなどは許されません。それがわかっている人は、自分が主人公であり、教会が小さいか大きいかわ関係なく、この時代の主人公であることに気づくはずなのです。でも、正しい真理に基づいて、そこから得られる知識になっていないからバラバラなのです。キリストを中心にして、今まで通りの知識を武器にするような真似をしないで、キリスト、神のみことば、福音を武器にして、知識、経験はそのキリスト、福音のための道具にしないといけません。そのときに同じ志しになるのです。教会は自己主張などはいりません。それが教会です。ぜひ、今日のメッセージを通して、皆さんの内側で何か長い間溶けていないものが溶けて崩れていく、それで神の国が皆さんの内側にしっかりと建つ、それが約束なのです。なぜそれが必要なのかというと、私たちの個人の霊的狀態が変わることで、聖書的伝道運動、この時代のテーマである世界福音化が動き出すようになるからなのです。そのために礼拝が許されているのです。そのために御座の光が照らされて、み

ことばを通して皆さんの内側に知らず知らず長い間解けてないものが溶けて崩れていく、神のみわざが成されるところが礼拝なのです。その祝福の具体的な答えが皆さんにあることを、主の御名によってお祈りいたします。

(祈り)

恵み深い父なる神様。今日も御座のキャンプである礼拝に招いてくださりありがとうございます。みことばを通して、私たちの内側に当たり前に勘違いになっていたものが、神の光によって溶けて崩れる神の国が臨まれる祝福の答えがみなに豊かに与えられることを心からお祈りいたします。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。